

巻頭言

「聞こえを扱った小説」

理事長 新谷 友良

村上春樹の「レキシントンの幽霊」という短編集の最後に「めくらやなぎと、眠る女」という小品があります。25歳の「僕」が14歳の「いとこ」を耳の病院に連れていく30ページばかりの短い話です。

14歳という「いとこ」の年齢や、その「いとこ」が聞こえの障害を持っている、という設定だけでなんだか胸がキューツとなってしまいますが、その「いとこ」は右耳が悪いけれども左耳の聞き取りは大丈夫です。ただ、両耳共に聞こえの波があり、半年に1度ぐらいはどちらの耳もほとんど聞こえなくなってしまい、「ふと気がつくとな、まるで音がきこえなくなっているんだよ。耳栓をして深い海の底にいるみたいにさ」と書いています。

このような聞こえの状態は、なぞることのできる部分もありますが、自分とは違うな、と思うところもあります。ただ、彼が聞こえの問題に関心を持ち、この短編のような聞こえの状態をどのように観察し文章にしたのかは非常に興味があります。村上春樹は、他の小説でも「音抜き」という言葉を使って、聞こえなくなった状態を表現していますが、音楽に造詣の深い、大変耳の良い作家なので、逆に音が無くなった世界についての想像力が一段と深いのかもかもしれません。

人間の感覚は、視覚・聴覚・味覚・臭覚・触覚の五感で代表されますが、感覚を小説なりの文章にする場合、どの感覚を中心に文章を組み立てるのかときどき考えます。もちろん、その時の強い感覚が文章をリードすると思いますが、人それぞれ感じやすい、文章にしやすい感覚というものがあるような気がします。その点、村上春樹は文章を聴覚・音を中心に組み立てているようで、この短編のように聞こえについてのかかなり個人的な感覚をより濃く文章にしている印象を持ちます。

もっと言えば、村上春樹の独特なパラレルワールドへの移行には、いつも音の喪失といった分岐器が用意されていて、今までの世界は音を失って消えてしまい、回復した聞こえる世界はもう以前の世界ではない、といった流れが非常に自然に感じられます。ところで「めくらやなぎ」は実在の植物ですか？「ネコヤナギ」や「ゆきやなぎ」とは違うのでしょうか。知っている人がいたら教えてください。